

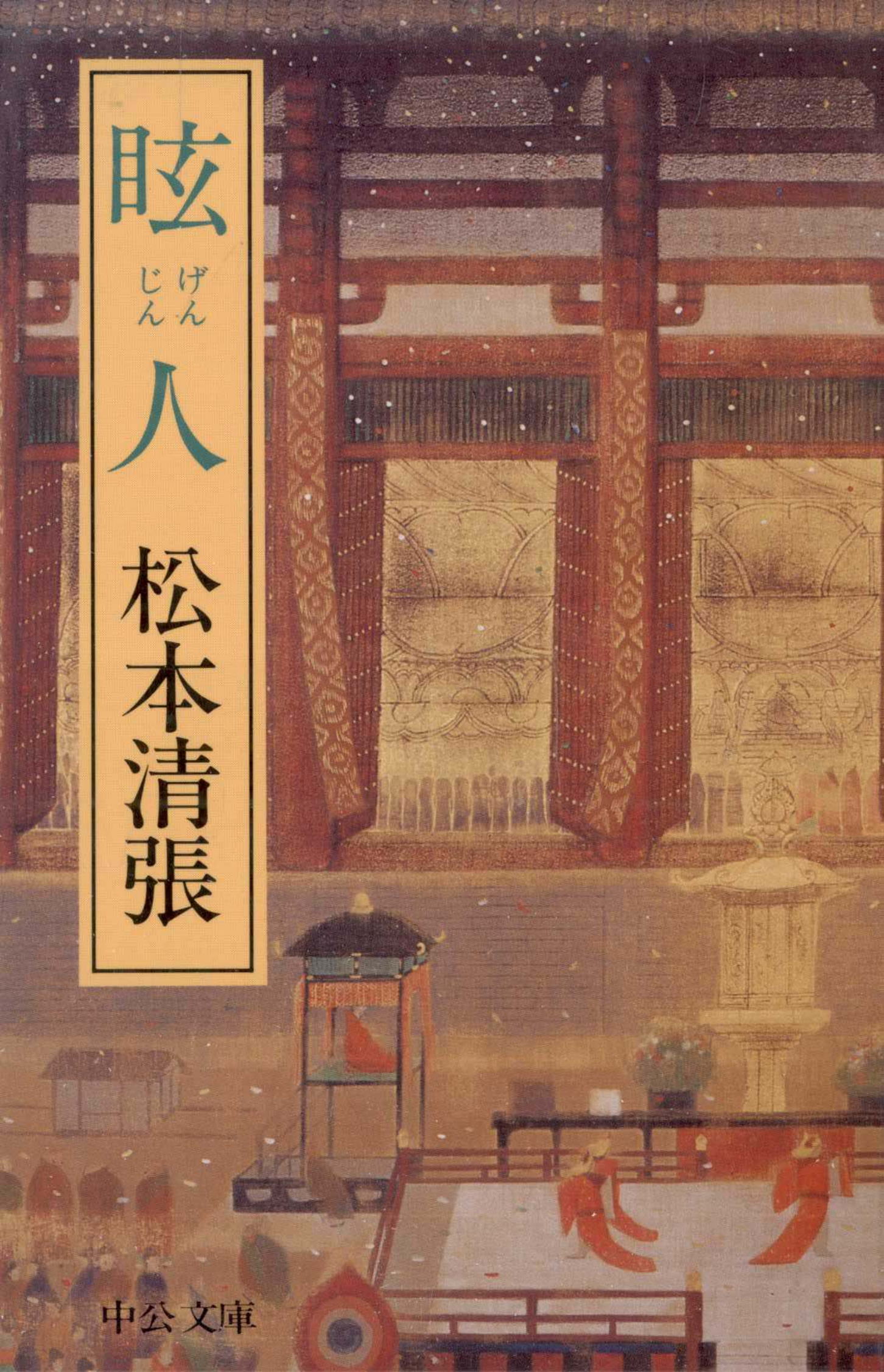
眩

じんげん

人

松本清張

中公文庫





中公文庫

げん じん  
眩 人 改版

---

定価はカバーに表示してあります。

1983年4月10日初版発行  
1998年6月3日改版印刷  
1998年6月18日改版発行

著者 まつもと せいちょう  
松本清張

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社 〒104-8320 東京都中央区京橋2-8-7  
TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部) 振替 00120-4-34

©1998 CHUOKORON-SHA, INC. / Nawo Matsumoto

---

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-203160-5 C1193

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

眩 人

松 本 清 張

中央公論社

表紙・扉  
白井晟一  
挿画  
平山郁夫

目次

第一部

机辺幻煙  
北曲  
胡商  
香煙  
妙藥談義  
邸閣  
花影傷風  
明器  
經  
狂  
洛陽遊行

二  
三  
四  
六  
九  
九  
二  
三  
三  
七  
五  
六

武后聚影

一八四

帰朝前

二〇一

帰朝船

二二六

漂流

二三二

## 第二部 李密翳の回想記

上京

二四九

倭朝の内道場

二六三

玄昉御看病

二七九

大麻草

二九三

療法

三〇八

内道場

三二八

山中幻術

三三四

才能

三四八

師弟問答

三六三

|       |      |    |
|-------|------|----|
| 解説    | 杉山二郎 | 五七 |
| 紫煙随想  |      | 五九 |
| 終章    |      | 五〇 |
| 帰国    |      | 四八 |
| 新羅の使節 |      | 四四 |
| 特効    |      | 四六 |
| 彷徨する都 |      | 四八 |
| 平城京の冬 |      | 四六 |
| 行基の出現 |      | 四三 |
| 造像実験  |      | 四〇 |
| 東国巡行  |      | 三九 |
| 広嗣謀反  |      | 三七 |



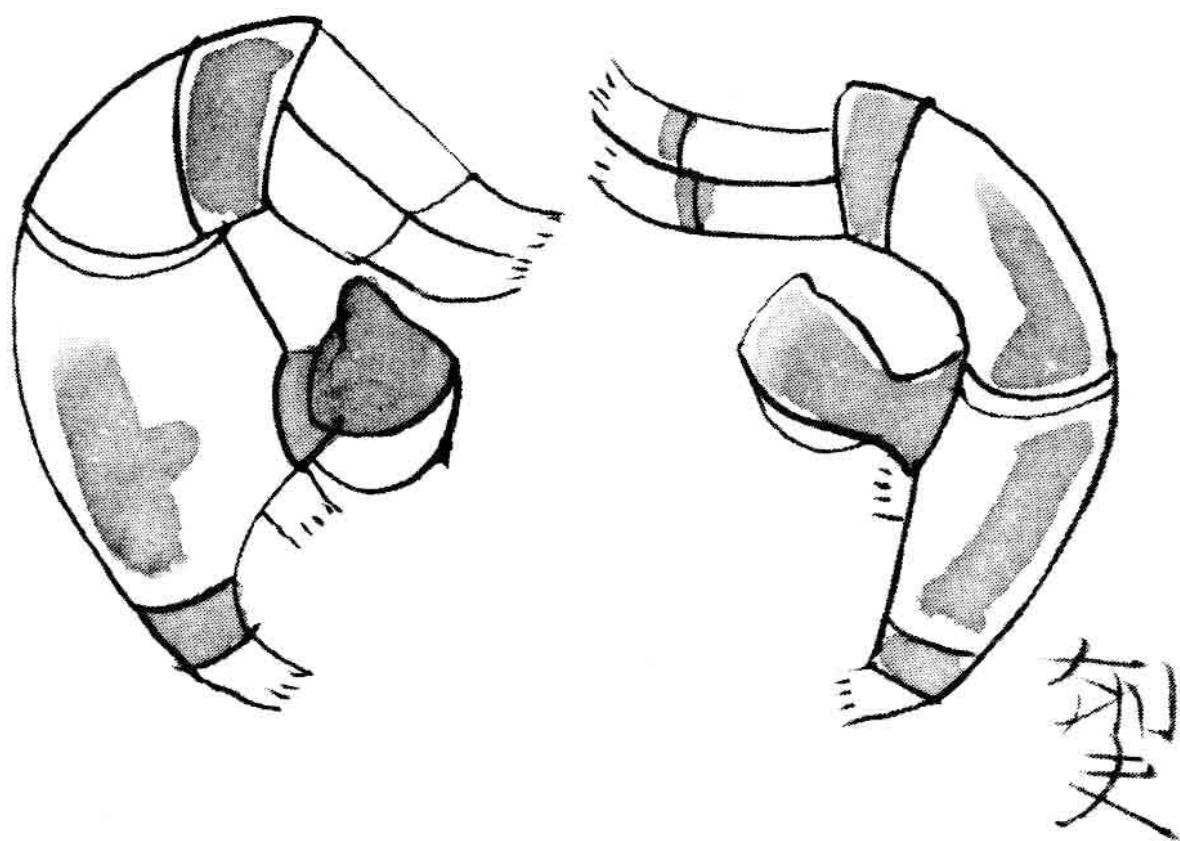
眩

人



# 第一部





## 机辺幻煙

一

### 僧、玄昉の生涯。――

玄昉の俗姓は阿刀氏。あと靈龜二年入唐して學問した。唐の天子は玄昉を尊さんぽんび三品に準じて紫袈裟を賜った。天平七年、彼は大使多治比たじひの真人まひとひろなり広成に随つて帰国した。經論五千余卷と諸仏像とをもたらした。皇朝もまた彼に紫衣袈裟を著きさせ、尊んで僧正と為し、内道場に置かしめた。（「続日本紀」、天平十八年六月己亥の条）

學問僧玄昉法師に封戸ふこ一百戸、田十町と扶翼の童子八人とを賜った。（天平八年二月丁巳の条）

大倭国やまとを改めて大養徳国やまととなした。この日、皇太夫人藤原氏（宮子。聖武天皇の母）は、皇后宮で僧正玄昉法師と会った。皇太夫人は以前から幽憂に沈み、久しく誰とも会わなかったが、法師がひとたび看病するやたちまち快癒した。よって天皇（聖武）は皇后宮に幸した。天皇は生誕して以来初めて生母に会えた。天下このことを慶賀した。玄昉には絶あしきぬ一千疋、綿一千屯、糸一千紵く、布一千端たんを賜った。（天平九年十二月丙寅（二十七日）の条）

是より後、玄昉の榮寵は日に盛んとなったが、ようやくにして沙門の行ないにそむいた。時の人はこれをにくんだ。ここにいたって玄昉は徙所で死んだ。世はこれを藤原広嗣ひろつぐの靈が害したと伝えた。（天平十八年六月の記事のつづき）

——「続紀」が僧玄昉について載せているのはこれだけである。だが、玄昉にかかわる伝はこの正史以外にもある。

「三国仏法伝通縁起」中の「法相宗」の項が玄昉にふれているが、要は次のとおり。

——法相宗は法相大乘心理円実宗で、また唯識宗ともいう。玄奘三蔵が天竺に往き、大いにこの宗を伝えうけ、支那国に還って天下に講話した。

三蔵の上足（高弟）に慈恩基師じおんがある。慈恩の上足に淄洲ししゅう師がある。淄洲の上足に樸陽師よく（智周）がある。嫡祖相承うけて横豎いよいよ弥昌よしかんとなった。

法相宗を日本に弘伝したのは一人にとどまらない。昔、百済くだらの仏法がはじめてこの国に伝わってから百二年を経た孝徳天皇の白雉四年、道昭和尚が海を越えて唐に往き、玄奘三蔵と遇つて法相宗を学んだ。これが唐の高宗皇帝の永徽四年である。玄奘三蔵年五十一。慈恩大師齡二十二。道昭と三蔵の宿は同房にあり、道昭と慈恩は同学である。道昭は久しく三蔵の門下に在り、積年にわたつて学を受け、帰朝してこれを弘めた。道昭が法相宗の第一伝者である。

第二伝者は、智通と智達である。両人は道昭の入唐後六年を経た斉明天皇四年に新羅船しらぎに乗つて入唐し、玄奘三蔵に遇い、法相学を学んだ。

第三伝者は、道昭の入唐後五十一年を経た文武天皇の大宝三年、勅命をうけて入唐した新羅智鳳・智鸞ちらん・智雄の三人である。樸陽大師に謁して法相宗を学んだ。

第四伝者は、道昭の入唐後六十四年を経た元正天皇の霊龜二年丙辰に入唐した玄昉法師である。すなわち玄昉も智周について法相宗を研鑽した。時に智周は年三十八。玄宗皇帝の開元四年であつた。玄昉法師は在唐して法経を学ぶことおよそ二十年間であつた。玄昉は日本では義淵の上足七人、行基ぎようきや良弁らうべんなどの筆頭である。――

以上によると玄昉は唐より法相宗を将来した第四伝者で、その唐土での師は樸陽大師といわれた智周である。

智周大師の正体はよくわからない。智周の名を載せた「三国仏法伝通縁起」（三巻）というのは、東大寺の凝然が撰した鎌倉時代のもので、印度・支那・日本の三国にわたり、諸宗の伝通縁起いわけを略記したものである。

辻善之助の「日本仏教史」は右の「三国仏法伝通縁起」について説明して言う。

《大宝三年（一三六三）に智鳳・智鸞・智雄が入唐して樸陽の智周より法を伝え、三師は法を興福寺の義淵に伝え、義淵は之を玄昉に伝えた。玄昉は養老元年（一三七七）に支那に往いて智周について本宗を究め、天平七年（一三九五）に帰朝し、興福寺に於て之を弘めた。第一伝の道昭が帰朝後、元興寺に住して本宗を弘めたことにより元興寺に伝えるところを南寺伝といい、玄昉が興福寺に伝えるところを北寺伝という》

このほか玄昉のことを書いた現代の類書は、みな玄昉の師を智周としている。これを「三国仏法伝通縁起」にだけ拠っているのかというところでもない。この鎌倉期のものよりも早い平安期の「今昔物語」にも、

「玄昉僧正、亘唐伝法相語」（タウニワタリテホツサウヲツタヘタルコト）に、

「玄昉僧正ハ智周法師ト云フ人ヲ師トシ、立ツル所ノ大乘法相ノ教法ヲ学ビ、多ノ正教おほくしやうげう

ヲ持渡ケリもちわたし

とある。してみれば「伝通縁起」の撰者は後からこれを見ていたことになる。

この「今昔物語」にある玄昉僧正のくだりに、

「……然ル間、天皇ノ后、光明皇后、此ノ玄昉ヲ貴ミたふと帰依シ給ヒケル程ニ、親シク参リ仕  
リテ、后、此ヲ寵愛シ給ケレバ、世ノ人不吉様ニ申シよからぬやう繚ケリあつかひ」

と、玄昉と光明皇后とが、とくべつな間柄にもとれる文章がある。

最初に玄昉との間を取沙汰されたのは皇太夫人宮子である。したがって「今昔物語」のこのところは宮子と光明皇后とをとり違えているか、または間に宮子を飛ばしているかである。

ところで、皇太夫人宮子が久しく幽憂として人事を廃していたが玄昉を見て云々の「続紀」の原文は、以前には「自誕レ天皇、未三曾相見あいまみ法師、一看惠然開晤」と訓点していた。これだと天皇が生れてより未だ曾つて法師と相見えたことがない、この日（天平九年十二月二十七日）「はじめて玄昉に会い、惠然として開晤した」という意になって文意がよく通じない。それを佐藤誠実がこの訓点の誤りを弁じて、これは皇太夫人が主語で、正しくは「自誕天皇、未曾相見」で区切り「法師一看、惠然開晤」であるとした。（「史海」第七卷）